

令和6年度 第3回

杉並区区政モニターアンケート
「特別支援教育について」

集計結果報告書



令和6年8月実施

杉並区総務部区政相談課

「特別支援教育について」

調査の概要

1 調査の目的

杉並区には全国に先駆けて、昭和26年2月に特殊学級「済美学園」が開設され、その後、養護学校義務制により、昭和54年4月に現在の杉並区立済美養護学校が開校しました。

また、昭和44年10月には杉並区立堀之内小学校に、日本で初めて自閉症の児童を対象にした堀之内学級（情緒障害特殊学級）が開設されるなど、杉並区は古くから、特別な教育的支援の必要な児童・生徒に対する教育を先駆的に取り組んできました。

「特殊教育」は、障害の重い、あるいは障害の重複している児童・生徒の教育に軸足を置いていましたが、全ての学校において、障害のある・ないに関わらず、個別の教育的ニーズのある、全ての子ども一人ひとりの教育環境の一層の充実を目指して、平成19年4月に、「特別支援教育」に転換が図られました。

特別支援教育は、障害のある児童・生徒も障害のない児童・生徒もともに学び、互いに理解を深める大変重要な取組であり、より一層の推進のために地域の方々のご理解とご協力が必要となります。

現在、杉並区教育委員会では、特別支援教育推進計画（令和7～9年度）を策定しているところですが、地域の方々のご意見等を反映させるため、アンケートを実施しました。

2 調査期間 令和6年8月28日～令和6年9月10日

3 対象者（区政モニター） 198人

4 回答者数 160人 回答率 80.8% ※各設問の回答者数は表右上にnで表示

5 回答者構成

単位：人

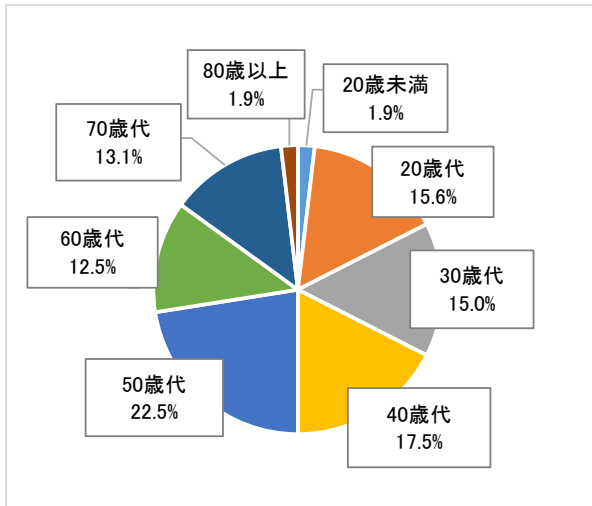
〈年代別構成〉	20歳未満	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳以上	合計
男性	3	10	9	11	15	11	16	1	76
女性	0	14	15	15	20	9	5	2	80
回答しない	0	1	0	2	1	0	0	0	4
人数	3	25	24	28	36	20	21	3	160
割合	1.9%	15.6%	15.0%	17.5%	22.5%	12.5%	13.1%	1.9%	100%

単位：人

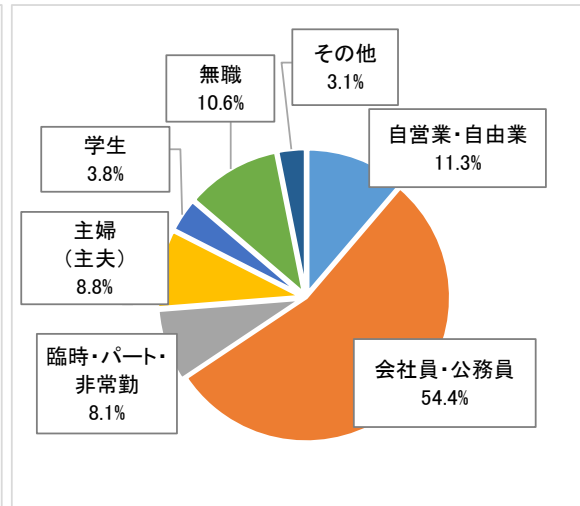
〈職業別構成〉	自営業・自由業	会社員・公務員	臨時・パート・非常勤	主婦（主夫）	学生	無職	その他	合計
人数	18	87	13	14	6	17	5	160
割合	11.3%	54.4%	8.1%	8.8%	3.8%	10.6%	3.1%	100%

その他：著述・翻訳、看護師、団体職員

〈年代別構成〉



〈職業別構成〉



◆基本事項についてお聞きします。

問1 あなたの性別をお答えください。

問2 あなたの年齢をお答えください。

問3 あなたの職業をお答えください。

※問1～問3の結果については、上記『調査の概要「5 回答者構成」』のとおり

問4 杉並区の教育では、共生社会の実現に向け、(※問4③参照)インクルーシブ教育システムの構築のため、特別な教育的支援を必要とする児童・生徒に対して、全ての学校で特別支援教育を行っています。
あなたは、特別支援教育に関して、次の言葉や意味について、知っていますか。(○は1つだけ)必須

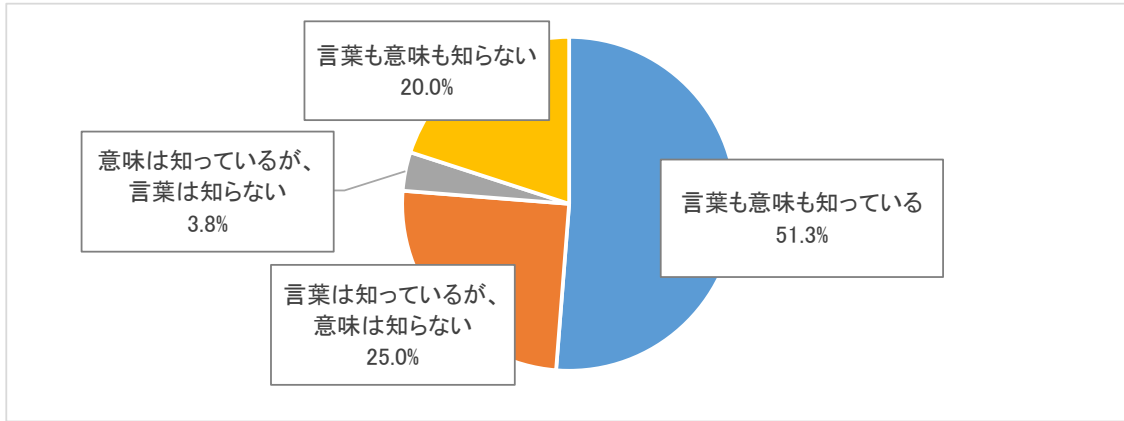
① 特別支援教育

特別支援教育とは、障害のある児童・生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、児童・生徒一人ひとりの教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うもの。

「特別支援教育」という言葉とその意味について、

n= 160

	全体		10・20代	30・40代	50・60代	70歳以上
言葉も意味も知っている	82	51.3%	19	26	27	10
言葉は知っているが、意味は知らない	40	25.0%	6	14	12	8
意味は知っているが、言葉は知らない	6	3.8%	0	0	4	2
言葉も意味も知らない	32	20.0%	3	12	13	4
合計	160	100%	28	52	56	24



問4-①-1(問4の①で「言葉も意味も知っている」又は「言葉は知っているが、意味は知らない」又は「意味は知っているが、言葉は知らない」と回答した方へ)
どのようなことを通じて特別支援教育に関する言葉や意味を知りましたか。
例)特別支援教育に関する講座の受講、知り合いに対象の児童・生徒がいるなど

「言葉も意味も知っている」と回答・・・

【仕事等に関連して】

- 職場で接しているから
 - ・特別支援の教育の現場や職場で障害者雇用の社員と働いている。
- 職務上関わりがある
 - ・ソーシャルワーカー、保育士、ケア・マネージャー、監査委員
- ボランティア活動など
 - ・社会福祉協議会のファミリーサポート協力会員として児童の通学支援を行っている。
 - ・過去に学校介助員を行った。
 - ・ボランティアとして活動等、障害者に対する社会奉仕活動

【家族や知人を通じて】

- 家族
 - ・子どもや孫から知った。(ほか5件)
 - ・妻、親、兄弟が特別支援教育の現場で働いている。(ほか3件)
 - ・家族が特別支援教育を受けていた。

- ・ 家族に仕事の関係者がいる。
- ・ 母が定年退職後、放課後ケアワーカーをしている。

親戚・知人

- ・ 親戚の子どもや知人の教員を通じて知った。(ほか10件)
- ・ 知人等に仕事の関係者がいる。
- ・ 実家の近所の人定年後にボランティアをしている。

学校で

- ・ 通っていた小学校に特別支援学級が併設されており、交流があった。(ほか4件)
- ・ 自身が小学生だった時に学校に特別支援学級があり、その学級の障害を持つ児童と登下校時、休み時間など日常的に関わっていた。
- ・ 実際に小学校には特別支援学級というクラスがあり、授業内容によって一緒に受けたり別の教室に移動したりしている友達がいた。
- ・ 私が在籍していた学校では、学年に数名の特別支援教育を受けている生徒がおり、日頃から交流があった。(ほか3件)

【教育として】

大学の授業や実習

- ・ 学生時代に専攻していた心理学関係の授業で知った。
- ・ 大学でインクルーシブ教育についての講義を受けた。(ほか2件)
- ・ 大学の教育実習で特別支援学校に派遣された。
- ・ 大学で保育と社会福祉を学んだ際に知った。
- ・ 大学の教職課程取得時に知った。(ほか2件)

生涯学習の一環としての学習

- ・ すぎなみ大人塾(チガイラボ)を受講して知った。
- ・ すぎなみ地域大学の授業を受講して知った。(ほか2件)

【報道等から】

新聞・TV・SNS等で

- ・ 新聞などの記事
- ・ TVのニュース
- ・ 学校にはなじめないけど特別な才能をもっている子をサポートする会社の取り組みや、障害のある家族が困難を乗り越えて家族のきずなを深めていくドラマを見た。
- ・ インターネットやSNSなどを通じて知った。(ほか3件)

書籍

- ・ 育児書や教育関連の本を読む中で自然に知った。
- ・ インクルーシブ教育か何かの本を読んだ時に出てきた。(ほか2件)

お便り

- ・ 小学校からのお便りを読んで知った。

【その他】

- ・ 引きこもりの知人がおり、社会復帰を希望していたのでその一環で調べた。
- ・ 昔、武蔵野市に武蔵野東幼稚園があることを知り、自閉症の学級があることを知った。
- ・ 近くに障害者施設や特別支援学校があった。(ほか2件)
- ・ なんとなく。きっかけはわからない。(ほか2件)

「言葉は知っているが、意味は知らなかった」と回答・・・

【仕事に関連して】

- ・ 仕事柄、特別支援教育という言葉を知ることがあった。

【家族や知人を通じて】

家族が関係者

- ・ 兄が教員、親から聞いた。

知人から

- ・ 小学校の先生から聞いた。
- ・ 知人の特別支援学級の教員から聞いた。
- ・ 知人の子どもが特別支援学級に通学している。
- ・ 知人に、車いすの友達がいることで調べた。

- 学校で
 - ・義務教育中に通っていた学校に特別支援学級があった。(ほか4件)
 - ・娘が小学校へ行っている時、特別支援を受けている同級生がクラスにいた。
 - ・学校からのお便りで読んだ。(ほか2件)
- 近所で
 - ・行動エリアに学校など施設がある。(ほか1件)
 - ・昔住んでいた近所に養護学校があった。
 - ・身体的、知的に障害をもっている子どもを見た。(ほか2件)

「意味は知っているが、言葉は知らない」と回答・・・

【家族や知人を通じて】

- ・私が高校生であったとき、同級生から、その同級生の出身中学に特別支援学級(旧特殊学級)があることを教えてもらった。その後、身近の教育従事者に簡単な説明をもらったことがある。
- ・自分の子どもが通う中学校に特別支援学級があったり、学童や保育園で障害児の保育を実施している様子に触れていた。

【報道から】

- ・国や自治体の広報媒体、テレビの報道(ほか1件)
- ・ラジオなどの特集でそういった取り組みがある事は知っていた。

【その他】

- ・生活の中でそういった取組がある事は漠然と認識があった。
- ・漢字の通りの意味と理解している。正確な言葉は知らなかった。

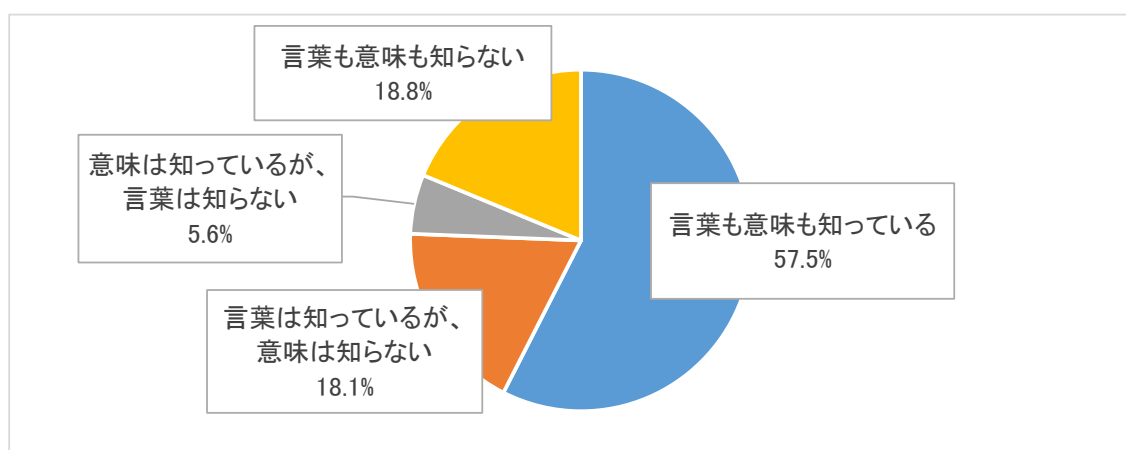
② 共生社会

共生社会とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会のこと。
誰も相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会のこと。

「共生社会」という言葉とその意味について、

n= 160

	全体	10・20代	30・40代	50・60代	70歳以上
言葉も意味も知っている	92 57.5%	16	29	30	17
言葉は知っているが、意味は知らない	29 18.1%	3	10	10	6
意味は知っているが、言葉は知らない	9 5.6%	2	1	5	1
言葉も意味も知らない	30 18.8%	7	12	11	0
合計	160 100%	28	52	56	24

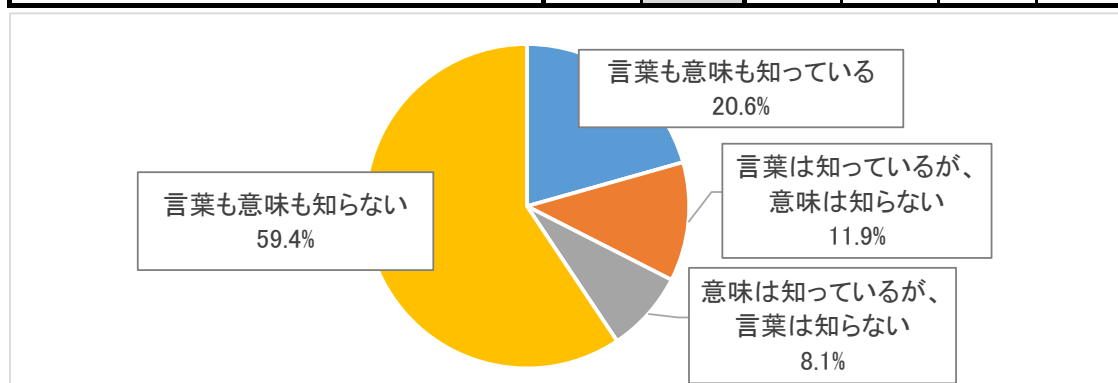


③ インクルーシブ教育システム

インクルーシブ教育システムとは、人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能にするとの目的の下、障害のあるものと障害のないものが共に学ぶ仕組み。

「インクルーシブ教育システム」という言葉とその意味について、

		n= 160				
		全体	10・20代	30・40代	50・60代	70歳以上
言葉も意味も知っている	33	20.6%	8	10	9	6
言葉は知っているが、意味は知らない	19	11.9%	4	2	10	3
意味は知っているが、言葉は知らない	13	8.1%	2	4	5	2
言葉も意味も知らない	95	59.4%	14	36	32	13
合 計	160	100%	28	52	56	24



問5 特別支援学校に通う小学生・中学生が、居住地の学校に副次的な籍(副籍)を置き、定期的に直接的な交流や間接的な交流を通じて、地域とのつながりの維持・継続を図る取組(副籍交流)を行っています。

この取組について知っていますか。(○は1つ) 必須

(例)

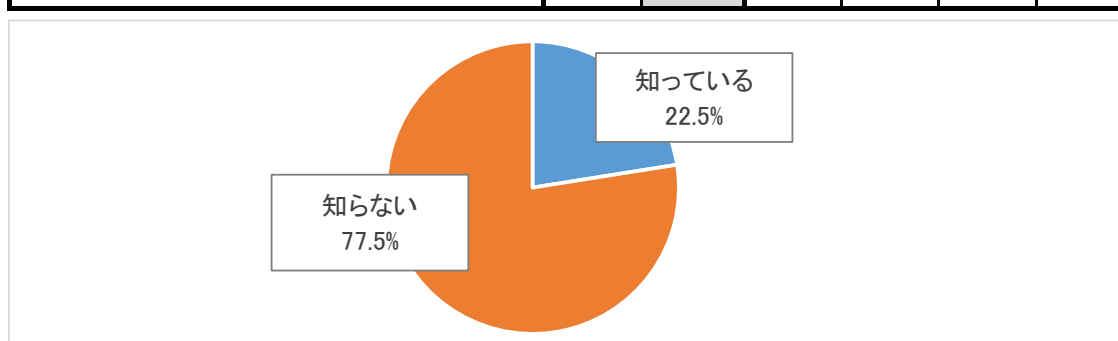
直接交流 お互いが顔を合わせて直接的な交流を行うもの。

- ・指定された学級での授業の参加
- ・学校行事(運動会・学芸会等)への参加 など

間接交流 顔を合わせず、間接的な交流を行うもの。

- ・学校だよりや学級だより等の手紙の交換
- ・展覧会での作品の展示 など

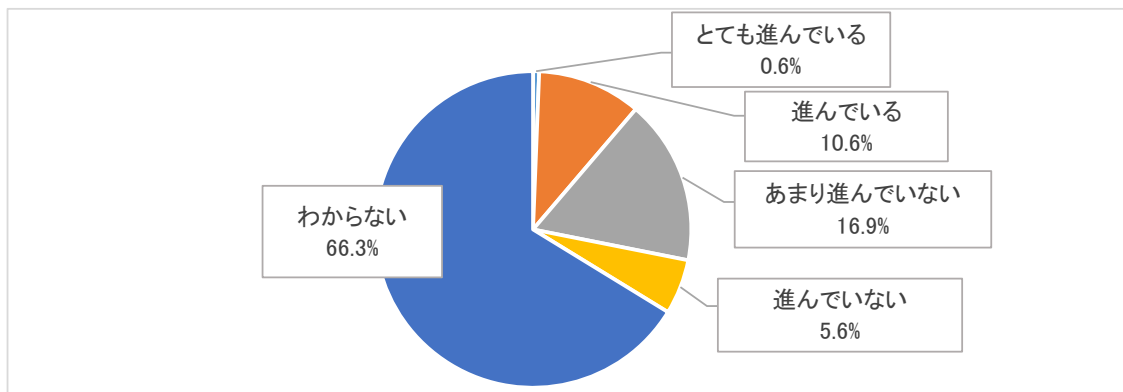
		n= 160				
		全体	10・20代	30・40代	50・60代	70歳以上
知っている	36	22.5%	7	13	10	6
知らない	124	77.5%	21	39	46	18
合 計	160	78%	21	39	46	18



問6 あなたがお住いの地域では、共生社会（※問4②参照）の実現への取組が進んでいると思いますか。（○は1つ） 必須

n= 160

	全体		10・20代	30・40代	50・60代	70歳以上
とても進んでいる	1	0.6%	1	0	0	0
進んでいる	17	10.6%	5	3	4	5
あまり進んでいない	27	16.9%	5	11	8	3
進んでいない	9	5.6%	1	2	4	2
わからない	106	66.3%	16	36	40	14
合計	160	100%	28	52	56	24



問6-1 問6で「とても進んでいる」又は「進んでいる」又は「あまり進んでいない」又は「進んでいない」を回答した理由をご記入ください。
（自由記述）

「進んでいる」と回答した理由・・・

【普段地域で】

- ・ 障害のある多くの方が近所のパン屋で働いていることを知っている。
- ・ 作業所が近くにある。知り合いの子どももいる。
- ・ 障害のある人を駅やまちで頻繁に目にする。(ほか4件)
- ・ 特別支援学校の学童を乗せたスクールバスがゆっくり通過する。

【学校で】

- ・ 今高校生の息子が小学校時代から特別支援を受けている子どもに対しても、何のわだかりもなく接しているので、杉並の支援は進んでいるし時代の変化を感じる。
- ・ 自分が通っていた頃はそのクラスの子達とも協力して受ける授業があったり、いろんな子がいるんだということは当時から肌で感じていた。
- ・ 学校に”言葉の学級”という特別支援学級があった。

【報道から】

- ・ マスコミの報道で感じる。

【イベント等で】

- ・ 区役所のイベントで見かける。
- ・ 区民センター協議会などの地域団体で、共生社会のセミナーを開催するなどされている。
- ・ 自分の住んでいる地域では、コミュニケーションの場所があり、自分の居場所にもなっている。多くの人が出て、皆で楽しく過ごせる。赤ちゃんや老人、障害を持つ人まで、皆が、一緒に過ごせている。さらに良い居場所になるように、皆さんで考えて、実行しつつある。このような場所がもっと全国に増えればと思う。問題は、やりたいことがあっても、お金がない。区などで、助成金をもっと簡単に、多く支給できないか。

「あまり進んでいない」と回答した理由・・・

【ハード面の遅れ】

- ・ 近くの小学校では、バリアフリーが進んでいない。

【情報提供の遅れ】

- ・ そういった取り組みや具体的な内容が周知されていないと思う。(ほか4件)
- ・ 小中学生の子どもがいない家庭への告知アピールがまったく感じられない。
- ・ 通常の生活の中で特別支援教育や共生社会に関する情報を見聞きする機会が少ない。(ほか1件)
- ・ そもそも共生社会という言葉を見聞きする機会もあまりないため、そういった取り組みを積極的に行っているという印象がない。(ほか2件)

【見かけない】

- ・ 区のイベントのみしか、そのような場面に遭遇しない。
- ・ 差別や排除があるわけではないが、日常的に関わるシーンが少ないことと、障害者が地域の中で働くことの難しさがあるのではないかと感じる。
- ・ そのような方々と接する機会がほとんどないから。(ほか2件)

【その他】

- ・ 子どもたちからは話は聞かすが、周囲に対象者がいないこともあり杉並区としては、現状はあまり進んでないと思う。
- ・ 結局、悪い意味ではなくても自分とは違うという意識がある人が多い気がする。
- ・ 手が届くようにするのは予算とかしくみが大変。
- ・ 実践事業者からよく相談を受ける。
- ・ 障害者の判断は診断によってされるが、実際に困っていても、病院に行けなかったり、医師とのコミュニケーションが難しかったり、サポートしてくれる親や関係者がいなかったり、そもそも当事者や親などが対象になりうることを知らなかったりするために診断されないことがある。その場合必要なサポートを受けられない悪循環がある。
- ・ 資本主義や、多数派を標準と定めた上での能力主義が強い世の中で、共生と名のつくものが少数者に同化をせまる形になっていることも多いと感じる。

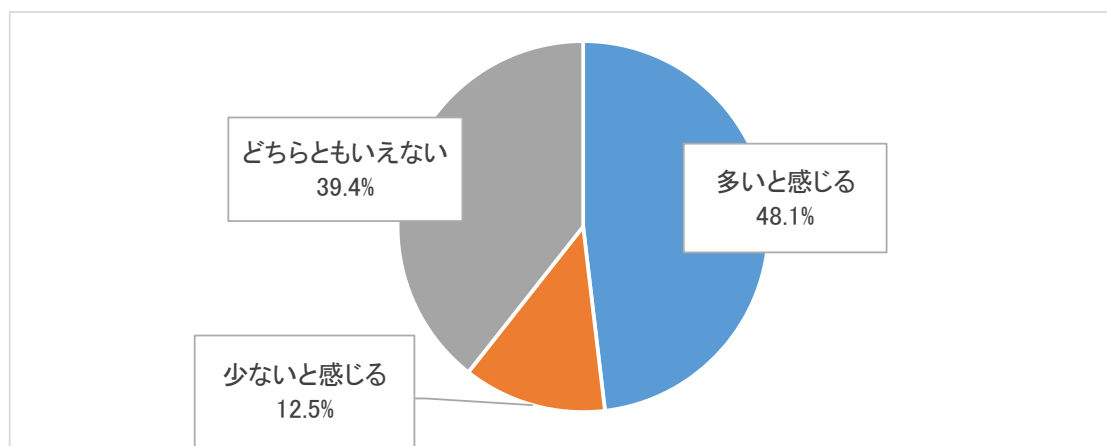
「進んでいない」と回答した理由・・・

- ・ 自分の子どもがいないこともあるが、どの言葉も聞き覚えがなく、耳なじみもない。
- ・ そのように感じる機会が普段生活している中ではない。
- ・ 身近で実感できていない。(ほか1名)
- ・ 一般の人は自分から進んで知ろうとは思いません。こちらから知ってもらおうように出ていかないと進まないと思う。
- ・ もっと助け合う意識を住民同士が持った方が良いと思う。
- ・ 社会的にマイノリティの人と日々の暮らしで関わることがないので、それだけマイノリティの人はそのコミュニティだけで暮らすことを迫られているいるんだろうなと思うことがあった。
- ・ まず、副籍交流という仕組みがあること自体が差別を生んでいると思う。
- ・ そもそも児童の少ない地域だと思う。

問7 先般、文部科学省より発表された調査結果の報告では、「通常の学級において、知的発達の遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示す」とされた児童・生徒の割合は、小中学校で8.8%(推定値、1クラスに2~3人程度)」とあります。この児童・生徒の割合を多いと感じますか又は少ないと感じますか。(〇は1つ) 必須

n= 160

	全体		10・20代	30・40代	50・60代	70歳以上
多いと感じる	77	48.1%	15	20	28	14
少ないと感じる	20	12.5%	7	6	6	1
どちらともいえない	63	39.4%	6	26	22	9
合 計	160	100%	28	52	56	24



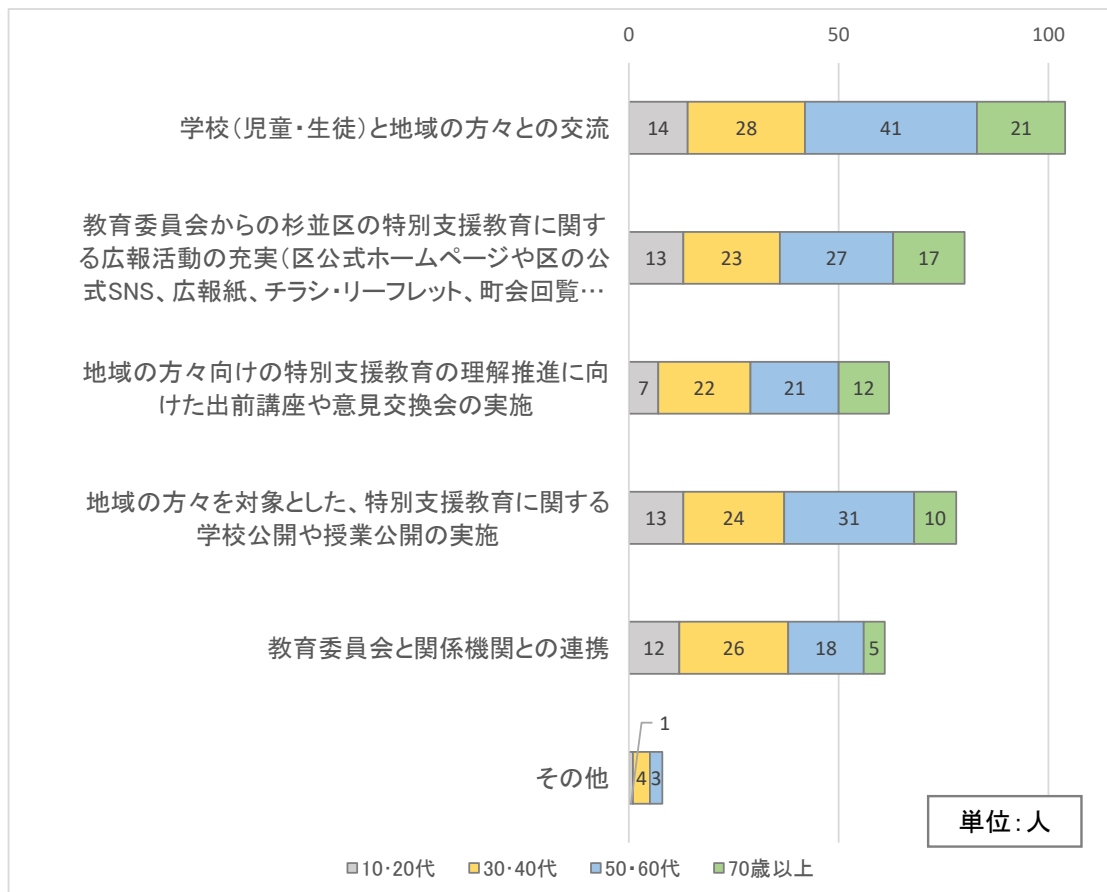
問8 特別支援教育の推進や、共生社会の実現のためのインクルーシブ教育の構築には、地域の方々の「理解」が欠かせません。地域の理解を進めるには、どのような取組が必要だと考えますか。(〇はいくつでも) 必須

n= 160

	全体	10・20代	30・40代	50・60代	70歳以上
学校(児童・生徒)と地域の方々との交流	104 65.0%	14	28	41	21
教育委員会からの杉並区の特別支援教育に関する広報活動の充実(区公式ホームページや区の公式SNS、広報紙、チラシ・リーフレット、町会回覧板等)	80 50.0%	13	23	27	17
地域の方々向けの特別支援教育の理解推進に向けた出前講座や意見交換会の実施	62 38.8%	7	22	21	12
地域の方々を対象とした、特別支援教育に関する学校公開や授業公開の実施	78 48.8%	13	24	31	10
教育委員会と関係機関との連携	61 38.1%	12	26	18	5
その他	8 5.0%	1	4	3	0

その他:

- ・法制度を横断した(例えば教育分野と社会福祉分野)取り組み。
- ・用語や概念、知識の先走りでは無く、実態としての周知の具体的な活動。
- ・特別支援級を通して目指しているものはなんなのか、わかるように広報する。多くの人が自分とは違う病気や障害を持った子どもたちは自分とは交わらない世界にいると認識しているから自分ごとにならず理解をしようという最初のステップにさえ至らないのではないだろうか。
- ・学校にとどまらず、バスや駅でのサポート体験や、オスメイトなど知らない世界を大人が体験できるようにする。
- ・分ける教育をやめていくこと。



問9 特別支援教育の推進や、共生社会の実現のためのインクルーシブ教育の構築には、地域の方々の「協力」が欠かせません。特別な教育的支援を必要とする児童・生徒に対して、地域ではどのような協力ができると思いますか。(〇はいくつでも) 必須

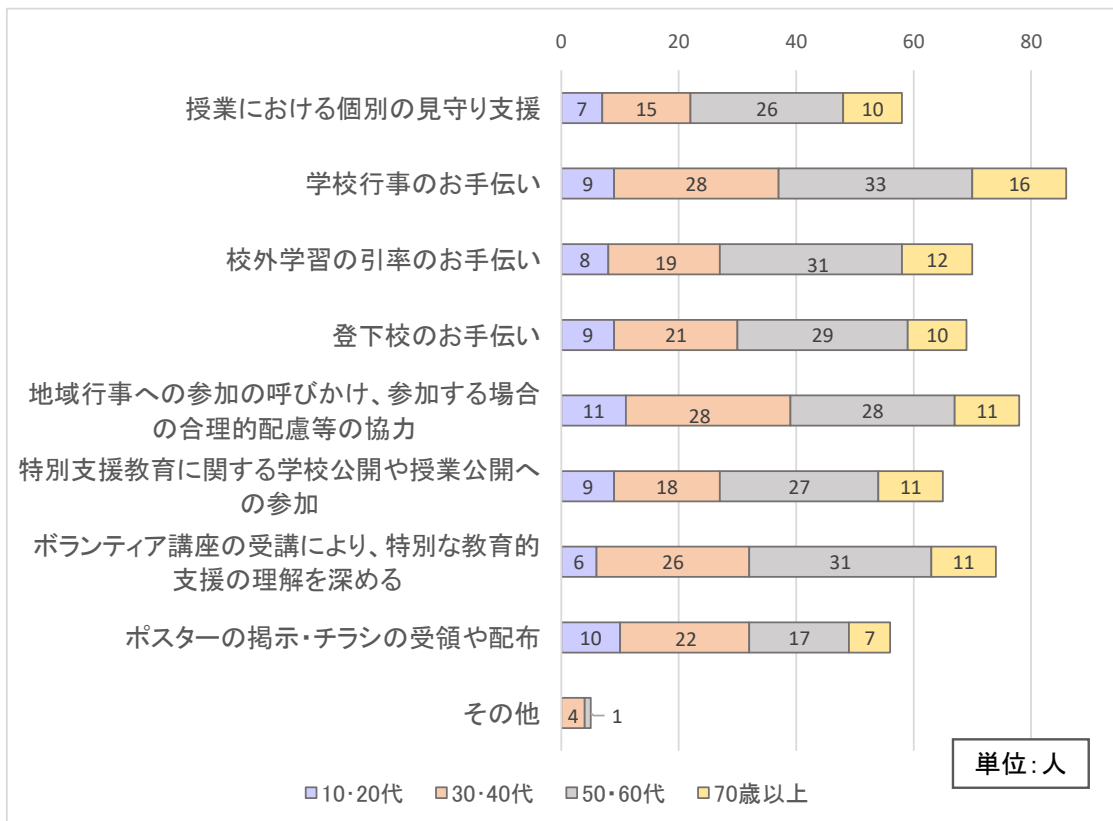
n= 160

	全体		10・20代	30・40代	50・60代	70歳以上
授業における個別の見守り支援	58	36.3%	7	15	26	10
学校行事のお手伝い	86	53.8%	9	28	33	16
校外学習の引率のお手伝い	70	43.8%	8	19	31	12
登下校のお手伝い	69	43.1%	9	21	29	10
地域行事への参加の呼びかけ、参加する場合の合理的配慮等の協力	78	48.8%	11	28	28	11
特別支援教育に関する学校公開や授業公開への参加	65	40.6%	9	18	27	11
ボランティア講座の受講により、特別な教育的支援の理解を深める	74	46.3%	6	26	31	11
ポスターの掲示・チラシの受領や配布	56	35.0%	10	22	17	7
その他	5	3.1%	0	4	1	0

その他:

・知識のない人の協力は場合により、トラブルに繋がることもあるかと思う。まずは認知度の上昇など協力できるための下準備が必要ではないかと思う。

・ボランティアではなく、金銭の発生する支援などをすれば良いのでは。無償にすると、一般的に責任が発生しないため支援する方も適当になる場合があるのではないか。



問10 その他、杉並区の特別支援教育について、ご意見やご要望を自由にご記入ください。

【情報提供の重要性】

- ・ 特別支援教育という言葉は知っているし意義は理解できても、今の学校や教育現場で具体的にどのような取り組みが行われているのかほとんど知らないことに気づかされた。現状についてなかなか自分で調べたりすることが難しいので、ぜひ広報活動は充実させてほしい。(ほか3件)
- ・ 特別支援教育の実態がわからないし、そのような取り組みを行っていることを知る機会がない。それ故に個人でどんな協力ができるか、地域社会がどのようにサポート出来るのか、を考える機会もない。区民への周知は継続的に行う必要があると思う。(ほか1件)
- ・ 特別支援教育について知らない事が多いが、関心を持って知っていききたいと思う。(ほか3件)
- ・ 杉並区の特別支援教育は立派と驚いた。時代、環境の違いを感じる。これからは図書館などで色々読んで勉強したいと思う。
- ・ 子供がいないのであまり自分ごととして考えられないのが正直なところ。(ほか1件)
- ・ 区民の認知度をもっと上げる活動が必要かと思う。メディア、媒体(40歳以上にはTV、若い世代にはSNS)で。あまり堅苦しい内容ではない広報活動が必要ではないか。
- ・ ポスターの掲示、チラシの受領や配布は経費がかかって実際には目に映ってはいるけれど脳まで届いているのだろうか。
- ・ 単身者は、あまり普段の生活で特別支援が必要な児童や生徒に会わない(会っていても気づかない)ので、アンテナが低く知識を得る機会がないと思われる。ちょっとした気遣いをするには、まず特別支援が必要な人がいる事、そしてちょっとしたら気遣いとはどんな事なのかという具体例の認知が広がれば、ファミリー層だけでなく単身者も協力しやすいと思った。
- ・ 地域の方が障害に対する正しい知識を得られるよう、これまで以上に啓発資料を通じた情報提供の機会を増やしてもらいたい。自閉症の人の特性が時に周囲に多大な迷惑をかけることがあるため、外部の人間が関与する事に強い抵抗感を抱いているとの話を聞いた。地域での協力を求めるのであれば、何が出来るか、また何が出来ないかを明確に線引きすることが重要だと感じる。そうすることで、支援する側もされる側も安心して関わる事ができるようになるのではと期待している。
- ・ 特別支援教育の充実を図るとともに、その実態を知ること、被支援者に対する偏見を無くすことが大切だと感じる。(ほか2件)
- ・ 普段の生活で馴染みが無いため、特別支援教育についての知識が殆ど無く、小中学校で特別な配慮が必要な児童生徒が8.8%との割合の大きさに驚いた。特別支援教育への区の取り組みや課題を、折に触れて周知してほしい。
- ・ 私自身、特別支援教育については、ほとんどと言ってよいくらい認識不足だったと痛感した。まずは、現在の取り組みについてのより具体的な実態を、小学生教育に絞って広く知ってもらうドキュメントを作成してはいかがか。
- ・ インクルーシブ教育は、究極の目的は健常者もそうでない方も自分らしく社会生活を送ることだと思う。双方ストレスがかからない形ですすめていくには、専門家の提案や意見をたたき台として提示するとよいのではないかと思った。
- ・ 保育園、幼稚園、それ以上の学校の職員向けに講習を行い、そこからもっと発信できるようにしたらよいと思う。
- ・ 中学生にかかわる活動をしているが、障害についてや指導の仕方を教わっていない。やはり、広くまわりの接し方などを理解してもらうことが大切。
- ・ 民間企業で障害者雇用の担当をしていたが、特別支援教育については全く知らなかった。教育から就職まで繋がるとより良いと感じる。
- ・ 教育の充実が、結果として生活保護受給者の削減や、障害年金受給者数の削減に繋がる気がするので、そういった二次的な効果もPRしてほしい。
- ・ 具体的な活動を知らず反省した。まずは関心を高めていくことが大切だと感じる。そのために地域との連携、さまざまな機会での関わり、接点を持つことが重要だと考える。
- ・ 特別支援学校の卒業生当事者、家族からのビデオメッセージなど体験、周囲との関係性、現在の状況などリアルな発信があると共感できることがあると思う。
- ・ 実際に接する機会が増えることで理解が広がると思うので、積極的にイベントをやるべき。(ほか1件)
- ・ 不審者が増えた世の中なので難しいとは思いますが、普段の生活でもニュースでみる情報でも学校という場合は閉鎖的に感じられる。お互いに理解、協力という環境作りがまずは必要なのではないかとと思う。(ほか1件)

- ・ 特別支援教育(特別支援学級)では専門職がケアすることになるだろうが、通常学級での共学の場合は専門職以外の援助の必要性が高いように思われる。
- ・ まわりの方の理解や協力がなくてはとてもできる事がない。もう少し特別支援教育のことを知ってもらえるように努めたらどうか。
- ・ 地域ぐるみで顔の見える対応が求められるところだと思うが、区教委はこのような重要な施策は地域に積極的に説明し、育てていく必要があるのではないかと。町会長や一部の特定の方々だけに届けて満足しているのでは意味はない。
- ・ 所属するコミュニティ、人間関係の中に特別支援教育に関するものがいなければ、啓発に力を入れても我関せずの心構えである人が大部分を占めると考える。特別支援教育が各自の生活にどのように関わっているか、共生社会の実現がどのように自分の生活を豊かにするか示し、当事者意識を醸成することが重要。
- ・ 実態を隠さず積極的に見えるようにしてほしい。関心度は高い。

【多様性の受容】

- ・ みんなが能力を発揮できるようになるとよいと思う。
- ・ 多様性を認める社会になるよう望む。(ほか1件)
- ・ インクルーシブな社会づくり、誰もを見捨てない杉並区になって欲しいと思っている。
- ・ 世に生を受けた子供が、社会と共生できる体制を行政がリードしていく姿勢は大事なこと。
- ・ 障害のある児童と捉えず特徴のある児童と考えて対処して欲しい。大変な事だと思う。
- ・ 自分が小・中学校生であった頃、同じ校舎に、おそらくダウン症児童の特別学級クラスがあり、数名の生徒がそこで学んでいたが、他の普通クラスと交流なく、完全に分かれていた。共生・インクルーシブ教育の推進が必要であり、あるべき姿であると思う。しかし、区も懸念されているように、進め方に十分な周りの理解と協力が必要だと思う。また、他の区の状況、取り組み等も知りたいと思った。
- ・ 同じ学校に特別支援学級があったため障害をもつ子供も同じように通学しており、話したり遊んだり交流があり、障害がある子という認識はありましたがそういうものだと自然に受け入れ特別意識することなく接していた。東京ではたとえば電車の中などで急に大きな声を出したりする子供や人に対し恐怖を感じていると思われる人を多く見かけた。私は小さい頃にそのような場面にもよく遭遇していたため恐怖心はないが、関わったことがなく、よく知らないから人は恐怖を感じてしまうのだろうと、その時認識した。私は自身の経験から、日々交流できる距離にいることが自然に理解を深めることになることを学べた。
- ・ 学年に1人か2人くらいが障害のある子供がいたが、今は見た目ではわからないくらいの障害があるお子さんもいる。これからの社会は、障害があるとかないとか、それを分けて社会や生活するのではなく、みんな一緒に考え協力しあっていくのが望ましいと思う。家庭だけでなく見守り等も含め、協力していくことを望む。
- ・ 実際にそのような子供たちに触れる機会がない人たちは、障がいを抱える人は自分とは違うとか、何となく敬遠したりするのが多く見られる反応だと思う。障害を抱える子供たちと接する機会を増やすことが重要だと思う。身体や心に全く支障がない完全な人はこの世の中にはいないと思う。生活や就労に困難を感じる人が多いか少ないかの程度の差であると思う。
- ・ 一般の人が何らかの受け入れ難い性格を持った子供と、他の子供と一緒に教育することは簡単ではないと思うが、性格の多様性を理解し、将来に亘り色々な人と一緒に生活するうえで特別支援教育は必要だとは思う。
- ・ インクルーシブ教育や共生社会について知らない、興味がない人にとっては、まだまだ、障がい者はその特性に合わせて専門の学校や施設に通うことが当たり前で、自分とは関係がないという感覚を持っている人が多いのではないかと。インクルーシブ教育や共生社会には、他の誰でもない自分自身も当てはまることもっと浸透したらいいなと感じる。また、“障がい”と一口に語っても中身は本当に人それぞれで、障がい者も一人の個性ある人間として地域の中で共に過ごせるよう、特別支援教育もどんどん地域の中に学びの場所を広げ、地域の人が障がいを持つ人を自分とはかかわりのない存在から自分と同じ人間としての隣人へと感じていける機会を作っていくってほしいと思う。
- ・ 社会教育センター主催の大人塾「ちがいらボ」に参加し自身の考えに変化が生まれた。支援という言葉自体も優劣がある様で余り好きではない。

【対象者からの情報収集】

- ・ 特別支援教育の当事者からの市民への要望・希望・協力・対応等の声を聴きたい。

- ・特別支援教育の現場で困っていること(人手不足等)への協力依頼からスタートすると取り組みが前進するのではないかと思った。

【対象者へのきめ細やかな対応】

- ・この領域に高齢者の積極的な活用を進めてはいかがか。杉並区には時間的にも金銭的にも余裕がある高齢者は多く、その方達にとっても社会から必要とされることで生き甲斐を与えられるのではないか。幾らでも興味深い取り組みを仕掛けることができると考える。
- ・地域の協力・支援はあるべき、より増加するべきであるが、担当する教員・補助員が不十分ではないのか。先ず、この対応を進めなければならないのでは。
- ・特別支援教育の意義の一つに、すべての児童が共生社会について自らの体験を通して学ぶことがあると思う。上からこうありなさいと指針を与えることよりも、子供たちに考えさせ、自主性を引き出す形で行うことが望まれる。ただ、子供たちは千差万別で、差別意識が強い子もいると思われるので、教師のきめ細やかな見守りと適切なアドバイスが望まれる。
- ・定期的な交流と十分な数の先生が必要だと思う。幼稚園の時は障害がある子を守ってあげなければならないと、みんながみんなその子を大事にしていたが、小学校で進路が変わり、障害のある子をあまり見かけなくなってから、児童の間でも偏見が形成され、悪口のようなものをいう人が出ていたように思う。通常の先生の数も足りていないと思うので、十分な数の人材を確保するにはどうしたらいいかを考えるべだと思う。担任2人体制とか。
- ・一般地域住民による協力、援助の可能性については、(例えば登下校時の交通安全補助員といった協力、援助よりもさらに特別な)この分野に特化した専門知識が必須だと考えられるので、ボランティア養成講習などを開催して、総合的な地域の理解の促進が必要だと思う。それによって、サポート要員を数的に増やすことも必要だと考える。
- ・特別支援教育について学んだ上で、ボランティアに参加できるシステムがあれば参加したいと思う人は多いと思う。
- ・インクルーシブ教育はとてもよいと思う。適切なサポートを地域に呼びかけ、児童、生徒が毎日楽しく生き生きと過ごしていけるお手伝いができるといいのではないかと思う。
- ・アンケートを見て、障害者を前提として共生社会やインクルーシブ教育を考えていることがよくわかった。社会的マイノリティは多様なので、それ前提だと色んな困難な人を取りこぼしているかもしれないと思う。あと、地域の人々の理解の前に教育システムの改善から考えたほうが良いと思う。
- ・どこまでボランティアで通せるのか。やはり少しでも手当は出した方が良いと思う。とても重い課題なのにボランティアはいかがなものか。
- ・子どもの困りごとやいわゆる問題行動を親が受け入れ難く、現場の先生にばかり負担がいき、授業の準備段階から疲弊し、授業で更に疲弊するケースが日々のものである。杉並区内の横のつながりのない先生方は、学校介助員ボランティアの存在を知らないままだったりする。ボランティアの処遇改善して、人材の有効活用をしてもらいたい。現場の先生も相談できる、ちょっと頼める人がいるだけで、気持ちの余裕ができるかと思う。
- ・インクルーシブ教育が大切なことは頭ではわかるし、内にこもるより社会とのかかわりを持つことが大事なのもわかる。しかし、自ら関わり合いを持とうとするかと問われれば、NOと答える人が、自分も含めて多いのではないかと思う。支援の対象となる人々にも濃淡があるように、支援する方にも濃淡があると思う。純粋なボランティアだけでは持続不可能になると思うので、多少のインセンティブ(お金でなくても)を使って、小さなこと、多種多様な事柄で、関わる人の人数を増やすことも必要かもと思った。
- ・現状を理解しておらず、ほとんど関りが無い一人の杉並区民として共生のためのなにかを考えなければと自省する。杉並区特別支援教育推進計画のビジョンに問題はないと思う。ただ一人ひとり個別な事案であること、また専門性や、時間、労力がかかることが推察される。そこに関わる人たちにたいして負担軽減や給与増などがあればなおよいのではと思う。
- ・教育内容や人的・物的環境の不足を問題視している。その支援には専門的な知識や豊富な資源も重要なことだと感じている。直接的な支援は、潜在的な専門職の人材や適切な資源の準備と活用により、効果的な支援へと繋がられるのでは無いかと考える。インクルージョンの考え方は、自分らしく生き方を選ぶというその選択肢こそが、特別支援教育を選択する上でのキーワードなのではないかと実感している。まずは専門的な支援とそのための資源の活用を保障することだと思うので、ただ人材を増やすのでは無く、適切な人材と支援に必要な教材や場所などの資源の確保と活用が必須だと思う。

- ・地域の好意に甘えるものではなくちゃんと金銭の発生した支援を行うべき。社会全体で支えるというのはそういうことでは。国ではボランティアでも金銭は発生しているし金銭の享受があることで責任が生じるため子どもの安全にもつながる。またお子さんはバスで移動させるべき。よく知らない人の支援よりプロの方が安全だと思う。
- ・特別支援が必要な家庭の方同士が意見交換できるコミュニティもあれば良いと思う。
- ・特別支援学級の児童を乗せたバスやお散歩しているグループを見かけるので、近くに学校があるんだなという認識はあるが、どこにあるのか、何か助けは必要なのかはわからない。挨拶した方がいいのか、手を振ったりした方がいいのか、逆に何もしない方が、落ち着いてお散歩できるのか、など。どこにあり、「見かけたら、声かけてください!」、または「声かけないでください」などのポスターがあってもいいのかなと思う。子供がいない家庭の方や、若い方には、なかなか重要性がわからないと思う。そのような学級があり、普通クラスとの連携があり、将来多様性が重要視されている社会でお互いにスムーズに社会生活が送れるようにしよう!というスローガンで交流を見守る優しさが根付くかと思う。医学、心理学も発達して、子供が発達障害、学習障害と判定される時代になってきて、いつ自分の近くに、そのように障害を抱えた方がお住まいになってもびっくりしないで、温かい社会になるように願っている。
- ・身内が杉並区の私立小から私立中に通っている。私立では試験があるので支援のいる子どもが入らない。なのでなかなか障害のある方と接することがない。これは問題だと思う。せめて区と連携して年に何度か交流がもてたらいいと思う。
- ・特別支援教育のみならず、普通教育にも同様の地域支援等が必要だと思う。特別支援教育に限った話ではなく、教育全般として共通としての底上げに期待している。
- ・特別支援教育によって、ほかの子供たちの気持ちなどもないがしろにされるようなことがあってはならないと思う。また、特別な支援が必要な子供とほかの子供たちを分断するようなことがあってはならない。どちらも等しく大切にするために、やはり多くの人手、正規職員のほかに正式に学校で雇うなども必要だと感じる。
- ・障害のある人へのサポート、配慮は必要で重要なことであるが、同時にその配慮が多く的一般生徒の学習機会や範囲を狭めることのないように、過度な配慮とならないことを望む。また、落ち着きがないといった障害とは言えない生徒に対して、授業の妨害になることから障害者のレッテル貼りが行われないように寛容な対応を望む。
- ・通常学級に通いたいと申し出る親御さんが多いと聞かすが、支援が必要な生徒は、必要な支援が受けられる学校で学べるとよい。通常学級で学ぶ生徒と別れて学ぶ事が双方にとって公平かつ有益だと思う。公平平等の意味を間違えると、支援が必要な生徒とそうでない生徒の双方が悲劇。区立学校不人気の払拭につなげたい。
- ・個人的にはインクルーシブ教育システムには反対。部分的なら可能だと思う。通常授業などの勉強においては分けた方がいいと思う。
- ・個性の違いで分けたり、隔離したりは今後まかり通らないと思う。支援を必要とする方へのサポートをするという意識ではなく、共生が当たり前という世の中でももちろんあるべきだが、こういった行動も平和な今しかできないので、早め早めに行うべき事の一つだと感じた。
- ・特別な支援が必要なのは、障害を持っている子だけに対してでなく、全ての子に必要だと思う。教員も、特別支援について学ぶとともに、人権についても学んでほしいと思う。
- ・健常者の児童への支援は全面的になしでよいと思っているので、障害のある児童・生徒の自立や教育また携わる教員への支援を手厚く充実させるべきだと思う。
- ・この分野で進んでいる国、国内地域と杉並区との比較・分析と、それに基づいた、杉並区として足りない部分を改善していくかの道筋を定め、着実に実行していくことが重要。区としてイニシアティブをとってほしい。
- ・杉並区としては、今回の「パラリンピック」原点である「共生社会を目指」、「人の心の痛みが判る」施策を特別支援教育に取り入れて頂きたい。
- ・優しさの話ではなく、善意の話ではなく、どんなに優しくいられない人や善意を確保し続ける余裕のない人でも、障害児や障害者、その他すべての困っている人を排除しない仕組みにしてほしい。制度に期待している。
- ・障害によって、学校か学級かが決まるのではなく、介護保険のように、サポートを選べるようになればいい。障害の重さによって持ち点がついて、例えば20点の人は、特別支援学校がいい人はそこに行ったり、普通のクラスで過ごさせたいなら持ち点20点を使って補助員がつけられるとか。軽い10点の人は、10点分しか補助員をつけられないとか。国連の勧告にあったように、インクルーシブには程遠いので、障害者の学校を分ける日本の制度を杉並区から変えてほしい。

- ・教育委員会と関係機関と連携してやってもらえば良いと思う。行事(運動会、祭、文化祭など)で地域への参加や手伝いを依頼すればよくて、わざわざ地域住民が養護学校の教育に首をつっこむのは違うかと思う。学校生活を見守り、依頼やSOSがあったら手伝えばよいと思う。

【その他】

- ・杉並区はよくやっていると思っている。
- ・区でできることはどんどんやってほしい。
- ・法令上の用語でどうしても使わなければならない場面は除き、杉並区だけでも「障害」や「特別」という用語をできる限り使用しないようにして、すべての人は同じ人間であるということを社会に広めてはどうか。
- ・立法上の問題もあるが「特別支援」という言葉には差別の歴史が刻まれていると思う。幼少期からの教育によってこの辺りは時間を経て変わっていくのかも知れないが、より適切な用語に変えた方が良いのではないか。
- ・特別支援学校と特別支援学級と特別支援教室との違いが、わからないところがあるので具体的な事例や人数等を広報してほしいと思う。
特別支援学校は独立した学校として設置される、特別支援学級は通常の学校に設置され、一般学級での学習が難しい障害がある児童生徒が対象である。特別支援教室は通常の学校に設置され、一般学級で学習をしつつ支援する、ということのようで、大枠理解したつもりである。疑問点としては、なぜ全学校ではなく、特定の地域の学校にのみ特別支援学級は設置されているのか。本来は特別支援学校や特別支援学級のある学校に通うのが望ましい子供が、住む場所によっては、学区の関係から特別支援教室に在籍している実態がないか。
- ・共生社会への実現に向けては地域全体での支援や交流の機会が増えることが、生徒たちにとって有益ではないかと考えている。また、私が以前住んでいた地域では、特別支援教育の生徒が他校の生徒と交流する機会が定期的に設けられていた。互いの理解が深まると同時に、生徒たちの自信や社会性が養われたのではないかと感じている。杉並区でもこうした取り組みが一層進むことを期待している。
- ・難しい問題であると思う。

令和6年度第3回
杉並区区政モニターアンケート
集計結果報告書

登録印刷物番号

06-0026(3)

令和6年10月発行

編集・発行

杉並区総務部区政相談課

〒166-8570

杉並区阿佐谷南1-15-1

☆杉並区のホームページでご覧になれます。

<https://www.city.suginami.tokyo.jp/kusei/koho/kocho/1012817.html>